

羽黒祭文

黒百合姫物語

一鳥海山の安倍貞任伝説一



序

江戸時代初期に作られたといわれ、昭和の初めまで三百年以上にわたって、鳥海山修験により語り継がれてきた物語があります。

それが「黒百合姫物語」で、秋田県由利地方を舞台にしながら、前九年の乱で活躍した安倍貞任につながる不思議な伝承を伝えています。

明治初年、「神仏分離令」によって、各地の修験は壊滅状態になったのですが、鳥海山修験もその典型的な例だったようです。

鳥海山と羽黒山は、ともに神仏習合の山でした。どちらも「仏」を棄てて「神」を選びました。羽黒山は「羽黒山神社」を中心にして、出羽三山信仰を再興する道をえらびます。いまの神社の社殿はその時のシンボルです。

しかし、鳥海山では神社として社殿は残したものの、修験の多くは里に降りてしまいました。鳥海山の頂上には、いまでも「大物忌神社」が祀られ、周辺の峰には「行者岳」「伏拝岳」「荒神岳」など修験を偲ばせる名が残っています。

「大物忌神社」は、延暦十七年（七九七）に完成した『続日本紀』にたびたび出てくる古い神社で、一〇世紀前半に施行された『延喜式』では出羽国の中でも第一に列せられた「式内社大社」です。

この歴史と修験の話は、それだけでも長い話になるので省略しますが、少なくとも江戸時代に活躍した修験の残痕がいまも各地に残されています。

鳥海山は、山形県側から遠望すると屹立した独立峰に見えますが、秋田県側、特に由利地方からは懐の深い大きな山塊という印象になります。

鳥海山に参詣する道は、江戸時代には修験が取り仕切っていて、秋田県側にも幾つもの登り口が設けられ、それぞれに修験が「カスミ場（領域）」を護っていました。

由利地方には、郷土民俗芸能「番楽」などがあり、この由来については色々な説があるものの、江戸中期に創られた「延年の民衆版」ともいわれています。

「延年」は、全国的に今も継承されている民俗芸能で、東北地方では、平泉の毛通寺・宮城県金成町の白山神社・山形県高畠町の安久津八幡神社など多くの所に残されています。

平安後期（院政期）より畿内の大寺院で行われた、仏事に附属する儀礼で、法会に続いて舞楽・猿楽・朗詠・白拍子・風流などが次々に上演される一連の儀式を「延年」と呼んだのが起源とされています。

本来は仏事に関わる芸能だったのですが、神仏習合のなかで混交し、明治期の分離令で神社が主に主宰するものとされました。

このような民俗芸能のなかに「チョウクライ口舞」というのが鳥海山に伝えられています。

「チョウクライ口舞」は①九舎の舞②荒金の舞③小児の舞④太平楽の舞⑤祖父祖母⑥ぬぼこの舞⑦閻浮の舞で構成されていて、子供たちが舞い手となるのは小児の舞、太平楽の舞、祖父祖母の舞の三つ、ほかは大人二人で舞うのが基本形のようにです。それぞれに笛、太鼓、鉦、歌い手の楽人が付きます。

この舞の起源は、天安元年（859年）までさかのぼり、当時、鳥海山に住んでいた悪魔を、慈覚大師が法力で退治、その時、神恩に感謝する御祭りで舞ったのがチョウクライ口舞といわれています

「チョウクライ口舞」は、唐樂の「羅稜王」と似た内容をもっており、「長恭羅稜王・チョウ - キョウ - ラ - リョウ - オウ」がその名の由来ではないかという説があります。「チョウ」は「鳥海」になぞらえられ、その下はなまって発音され、いまに伝わったという説です。この説は、近くにある「奈曾の滝」などの地名をふまえて、一山を奉納の舞台に見立てた雄大な風景を想わせる魅力的な説です。奈曾は延年にある「奈曾利」を連想させます。

唐樂の「羅稜王」は、五世紀の中国「北齊」で、才智武勇の「長恭蘭稜王」が仮面をつけて戦いに勝ったのを記念した舞曲といわれています。

また、戦死した父王が、戦乱に苦しむ息子・稜王を助けるために、墓から生き返って合戦の指揮をしたと伝承する話があります。

蘭陵王高長恭は北齊後期の武将で、東魏・興和年間（539～543）ごろ生まれました。父は東魏の重臣・高澄、母親はわかっていません。高澄の四男です。高澄の弟・高洋が北齊をたてたため、甥にあたる長恭も北齊の皇族となりました。

優しく美しい顔立ちで、声も美しかったといえます。その姿とは裏腹な勇猛さで、数々の戦功をあげました。後の唐の宴樂「蘭陵王」は、このエピソードを元に作られたといえます。しかし華々しい活躍が裏目に出て、長恭は第五代皇帝・後主に疎まれ、鳩酒という毒薬を賜り、亡くなりました。

これに似た延年の舞に「還城樂」があります。

死んだ父王が墓から蘇り、敵王の妻となった娘を助けて国を復興したという話です。

「羅稜王」は、かつては大和朝廷の儀式に取り入れられ、後には全国各地の「延年」の中に組み入れられて伝わっている舞曲の一つです。

「羅稜王」は、数多い「延年の舞」のなかでは、「唐舞」といわれるように、優雅に舞う「倭舞」と違って、仮面をつけ床を足で打つ「反閉」を伴う勇壮なものだったようです。

鳥海山の北には、「由利十二党」の伝承のように、近世まで分裂して群雄が割拠していました。また、江戸中期の百科事典『和漢三才図会』には、「鳥海山権現は慈覚大師が登ったところで、麓には鳥海弥三郎を祀った祠がある。鎌倉権五郎景政が彼に右眼を射ぬかれ、その眼を洗った川にいるカジカはすべて片目だ」と紹介されています。

鎌倉権五郎景政あるいは八幡太郎義家の伝説が「片目の動物」「片葉の植物」と結びつくのは、珍しいことではないのですが、鳥海弥三郎を祀ることと並列して伝承されていたことは面白いことです。

ここでは、前九年の乱（一〇五四―一六十二）に出てくる鳥海弥三郎と、後三年の乱（一〇八三―一八七）で活躍した鎌倉権五郎景政が混同されて伝わっていたのです。

鳥海弥三郎は、『陸奥話記』や『吾妻鏡』などにある「鳥海三郎宗任」と思われます。源頼義・義家と戦って厨川に滅びた、安倍頼時の三男（四男とも）とされ、貞任の弟で、平泉の近くにある鳥海柵（とりのみのき）を守っていました。

鎌倉権五郎景政は、『奥州後三年記』に、源義家の部下として十六歳で従軍し、右目眼を射られた時の豪傑ぶりが描かれています。

鳥海山という呼び名が何時おこったのかは定かではありません。古くは「大物忌峰（おおものいみのみね）」といわれてきました。

この山頂近くに鳥海湖があり、湖畔には「鳥の海御浜神社」が祀られています。鳥海は「チョウカイ」ではなく「トリノウミ」と呼んだ時期があったのではないかと考えられ、その由来は前九年の乱の「鳥海柵（とりのみのき）」にあるのかもしれませんが。

このような歴史と地名を背景にして「黒百合姫物語」を読み解くと、様々な光景が浮かんできます。

「黒百合姫物語」は、鳥海・羽黒の修験たちが語り伝えてきた「説教祭文」の一つであり、作り話に過ぎないのですが、そこには聞く人たちの心を揺する何物かが残されていたのだと思われまます。

この物語は、由利郡を舞台にしながら、遠く前九年の乱に滅びた「安倍氏の怨念」を追悼しています。

「安倍貞任伝説」は、「源義経北帰行伝説」と同様に敗者への想いを基本としながら、様々な編曲されて残されています。

岩手県胆江地区に「鬼剣舞」という民俗芸能が残され、国の「無形民俗文化財」に指定されて、その保存と伝承が進められています。

「鬼剣舞」は念仏踊りに由来し、その起源は早くとも中世末期ではないかといわれているのですが、多くの説では「高館物怪（たかだちもっけ）の怨霊」を慰めるものだと言われています。

そもそも「鬼剣舞」自体が、伝承された集落の庭元といわれる家元ごとに由来記を持ち、数多くの由来記があるのですが、藤原清衡が平泉に館を構えた時、あるいは源氏が平泉を攻め滅ぼした時に、「安倍一族の亡霊」が現れたので、その怨霊を鎮めるための念仏に起源を求めるのが大きな流れのようです。

「鬼剣舞」を地元では「モッケ」と略称するのはここに原点があります。

陸奥国の平泉と出羽国の鳥海山では、現在の感覚からすれば、全く違った土地に見えます。しかし、これは東京を基点とする南北線上で発想するからであって、東西線上に見ればそれほど遠いものではありません。鉄道や自動車のなかった時代を思えば、この距離感はさらに小さくなる筈です。

「安倍貞任伝説」は、青森県や岩手県だけではなく、山形県置賜地方にも残されています。長井に伝わる〈卯の花姫〉伝説もその一つです。

「黒百合姫物語」は、「安倍の血統」をいかにして伝えてきたかを基調にしています。

平泉の藤原秀衡が源頼朝に滅ぼされた時、秀衡の妹が鳥海山に逃れ、乱世にもまれながら、代々その血統を守り抜き、縁あって敵の御曹司の子を産んだ「小百合姫」の祈りによって、鳥海山の「白百合」が「黒百合」になった。

かいつまんでいえば、それだけの物語です。

だが、矢島家と仁賀保家を中心とした、由利十二党の争いを舞台としているため、より身近な話として、土地の人々を魅了してきたのでしょう。

この物語をどのように読み解くかは別にして、昭和初期に、この物語を自ら語り伝えたという本人が書き残した文章をたどることにします。



○第一節

レーロレン、レーロレン、レーンレン、レーロレン、レンレンレン - - （これは三味線の節回し）

昔々、奥州衣河の御館(やかた)、安倍の貞任殿と申すは、身の丈七尺五寸、百人力の力者(りきしゃ)で御座(ござ)つたれど、お心やさしくお情深きによって、出羽奥州の民百姓、仰ぎなつかぬものはなく、吹く風枝を鳴らさず、御代(みよ)静謐(せいひつ)に治まったゲナ。

然るところ貞任殿、ふとしたことによって八幡太郎殿と御仲違(おなかたが)ひになって、三々が九年の合戦、国中踏み轟(とど)ろかさぬ隈(くま)もなく、萬民の歎き申すべきやうないケニ、貞任殿、炎のやうなる息をつき、イヤイヤ我一人のために萬民を泣かせる道理はないぞ、いざや我死して、民百姓を助けようと、我と我手に首を刎(は)ねて、御厨川(みくりやがわ)の川邊の露とぞ消えらるる。

レーロレンレン、レンレン - -

《勝手な解説》

前九年の乱から物語が始まります。

貞任が民百姓を救うために自害する話は史実ではありませんが、後段の伏線として重要なことです。

また、「仰ぎなつかぬものはなく云々」の所は、なんとなく藤原清衡が作成したという『中尊寺建立願文』の一節を思わせます。

「出羽陸奥の土俗は、風に従う草の如く従い、戦乱の世を治めることができた」とその願文には書かれているのです。

でも、ここに出てくるのは清衡ではなく、安倍貞任で、前九年の乱で出羽奥州の合戦が治まったことになっています。

藤原清衡も、もとをただせば「安倍の一族」だったという簡略法が取られたのでしょう。

この省略法は後の節にも見られます。

第二節

さるほどに貞任殿の御妹、白玉御前と申さるるは、出羽の清原殿の奥方となって在しましたるが、安倍殿御館没落の由を聞き召され、イヤイヤかうしては居られぬぞ、先祖のあとを継いで民百姓を安堵させずばなるまいとて、

今年八歳の権太郎清衡和子(わこ)を召し連れて奥州に立帰り、平泉の御館を開かれたケニ。

清衡・基衡・秀衡の三代九十九年の間、出羽奥州の民百姓、仰ぎなつかぬものはなく、吹く風枝を鳴らさず、御代静謐に治まったところ、

秀衡殿、お情深きお人ゆえに、九朗判官義経殿を、我子の如くお世話申したが事の起りにて、鎌倉の右大将殿と御仲違ひになり、又もや出羽奥州にての大合戦、國中踏み轟かぬ隈もなく、遂に平泉の御館は夕の煙と消えらるる。

不思議なるかな秀衡殿は、貞任殿の曾孫、又鎌倉殿は八幡太郎の曾孫、宿世の業かと恐ろしし。

レーロレン、レーローレン――

《勝手な解説》

後三年の乱のことはみごとに省略され、安倍貞任の妹「白玉御前」が平泉を開いたことになっています。

判官義経のことは『吾妻鏡』『義経記』だけではなく、いまでも広く語られていることなので省略しますが、「白玉御前」については簡単に触れます。

ここでは、清原へ嫁いだ貞任の妹で、清衡の母となっています。

このような経歴の女人を文献で探せば、前九年の乱で活躍した藤原経清(つねきよ)の妻となり、経清が斬首されたあと、その間に生まれた清衡をつれて、出羽の清原武則の妻となった「有(あり)加一之(かいちの)末陪(まい)」(『吾妻鏡』による)しかありません。

清衡の母は、確かに「安倍の血統」を継いでいるのですが、詳しいことは謎です。しかし「白玉御前」になぞらえられた伝承は珍しいものです。

白玉御前伝説は、「悪玉御前」「お玉姫」「阿久利姫」などと名を変えながら、坂上田村麻呂の蝦夷征伐に関連して全国的に流布した伝説です。

田村麻呂が遠征先で出会った現地妻の、悲恋の物語が基本形です。その意味では、弱者への哀れみがあるといえます。

後三年の乱を省略して、しかも「義経」「白玉」という有名な伝説をさりげなく配置したこの語り口は、後段で由利郡合戦の詳細を語る時に効果が出てくる仕掛けになっています。

第三節

さるほどに秀衡殿の御妹萬徳御前と申さるるは、奥州岩城の郡司次郎太夫則道殿の奥方となつて在りましたるが、平泉の御館没落を聞き召され、イヤイヤかうしては居られぬぞ、鎌倉勢を追い返して民百姓を安堵させずばなるまいとて、今年八歳になる香澄姫といふ女子を召し連れて、出羽の田川の郡司が砦を宿に、地侍八萬騎を召し集め、大河の次郎兼任を大将にしたるケニ、兼任即ち八萬騎をすべて、奥州へ立越えんとするところ、三代相恩の主君に叛いて鎌倉殿に降参した由利仲八維久が裏切の為に、無残やな八萬騎、ちりぢりとなつて亡び失せた。萬徳御前、今はこれまでよとて香澄姫を連れ、男三十三人、女三十三人をお供に召して、鳥海山へ登られ、鶴間ヶ池の池の岸に女別当の宮をしつらへ、ザングザングと鈴を鳴らして、龍王のお使はじめとなられ申した。

そもそもこの鶴間ヶ池と申すは、龍王の御すまひにて、廻り三十三丁、深さも三十三丁、東は大日ヶ峰、南は阿彌陀ヶ峰、北は勢至ヶ峰、西は龍王の瀧づたひに、西海の荒浪うちよせる有耶無耶の関所なれど、王法の衰へてよりこのかた、鬼神のすまひとなつて、旅人をなやますとの唱へあれば、往來の人の跡も絶えて、淋しい月日を送くらるる。

レーロレン、レーロレン - - -

《勝手な解説》

話は一挙に平泉の没落へと飛びます。

貞任の妹「白玉御前」に替わって、ここでは秀衡の妹「萬徳御前」が出てくるのですが、「女人の血統」がこの祭文の主題ですから当然といえます。

「奥州岩城の郡司次郎太夫則道」は中世・近世に磐城郡（現、いわき市）を支配した豪族と思われます。その祖先が藤原清衡の娘婿となり、以来「岩城次郎」を名乗ったといわれています。

福島県浜通り地帯は、清衡の父・経清（亘理の権太郎）や母の妹・中(な)加一之(かいちの)末陪(まい)（『吾妻鏡』による）の夫・平永衡（伊具の次郎）の出身地でもあります。

出羽にいた「大河次郎兼任」は、平泉没落後、源頼朝一軍が引き上げる所を狙って合戦を挑みました。

建久元年（一一九〇）一月のことです。冬の出羽国を出立し、途中、鎌倉に降参した由利維平・宇佐美実政を破って、陸奥国へと進軍しましたが、栗原の郡に入った所で鎌倉軍の反撃に合い戦死しました。

「由利仲八維久の裏切」だけが敗戦の理由ではなかったのです。

しかし、鎌倉幕府は鳥海山の北側に広がる丘陵地帯には、力のある地頭を配置せず、旧勢力を温存することにしました。由利仲八維久もその中の一人でした。

当時では稲作には向かない、魅力のない地帯だったからかもしれません。

これが次の第四節の伏線となります。

萬徳御前が八歳の娘「香澄姫」をつれて逃げた鳥海山には、龍王が住む池があります。その周辺の山に仏が祭られている風景は、修験の山の元風景といってもいいものでしょう。

そして、「有耶無耶の関」です。

現在の秋田県と山形県の県境近くに、その関跡の記念碑があります。鳥海山の山塊が日本海に落ち込む所で、三崎峠といわれるこの一帯は、岩石の多い越え難い峠であったと思われます。この有耶無耶の関は、江戸期の旅行記にも幾つか紹介されています。

有耶無耶の関といわれて伝承されるのは、ここだけではなく他にもあり、平安期の歌人・能因の歌枕以来語り継がれてきた出羽の名所です。

しかし、ここに触れることによって由利の郡が登場する舞台は、すっかり整ったことになります。

少々外れているとはいえ「歴史の面影」があり、「奥州岩城と出羽田川」に触れることで広域性をしめし、「すでに広まっていた伝承」を踏まえ、この物語を聞く人々の心を高めてくれるのです。

第四節

さても其後さるほどに、出羽奥州の乱世やむときなく、矢叫びの声の絶え間も嵐吹く、鳥海山の北表、由利の郡は一入(ひとしお)の乱れなるによって、鎌倉殿の仰せにて、由利の十二党を下さるる。

初筆には矢島の大江大膳の太夫、院内の仁賀保大和守、赤尾津の赤尾津孫九郎、子吉の子吉兵部少輔、芹田の芹田伊予守、打越の汀越左近、石澤の石澤次郎、岩谷の小笠原右兵尉、湯保の湯保走雙記齋、鮎川の鮎川筑前守、下村の下村彦次郎、玉米の小笠原信濃、これを由利の十二党とは申さるる。

十二党の旗頭、矢島の大江大膳太夫殿の二代目、左衛門尉義満殿は、生れつき病身にて、捗々しい下知もならぬによって、

旗頭の役を仁賀保殿に譲つたれども、このさまにては行々矢島の城も覚束ない。

あはれ強勇の跡継を授けてたび給へと、鳥海大権現に立願をかけたところ、其儀ならば、鶴間ヶ池の女別当へ参れとのお告げがあったケニ、地侍八人に案内させて、女別当の宮へと参らるる。

さるほどに時の女別当は、萬徳御前の御孫玉百合御前にて、矢島の殿御参詣と聞き、ザングザングと鈴を振つて舞の袖をば翻へし、何の御心願で参られましたかと尋ね申さるる。

左衛門尉申さるるやう、我等生れつき病身にて旗頭の役も仁賀保に譲り申した。この末、城をも人に譲らでは叶はぬことになるか、さらば先祖へ不孝でお座るによつて、何とか強勇の跡継がほしうお座る。

依つてお山へ立願したところ、女別当へ参れとのお告げ、承れば別当殿には御息女二人あるケニ、

その一人を申し受けて、我等の妻にしたらば、強勇の跡継が出申さうと存じまする。

お聞入れ下されと他事なき頼みに、玉百合御前申さるるやう、折角のお頼みなれど、当家は先租安倍貞任殿の家筋を守るケニ、

婿はとれども嫁には出し申さぬ。その婿も龍王の外は婿に取つた例はお座らぬといふ。

左衛門尉殿思案を極め、さてさて余儀ない御家例、さらば我等大江の苗字をやめ、矢島を名乗つて龍王殿の相婿にならうほどに、

是非とも御息女を所望致すといふ。玉百合御前も、さほどの御執心ならばとて、姉娘の玉鶴姫を矢島殿へ嫁入させ申した。

之より矢島殿では安倍の矢島と申したるが、玉鶴姫の腹から生れたるは、安倍五郎の満安とて、身の丈七尺五寸胸の幅三尺五寸、骨柄逞しき勇士にて、力は何ほどあるか測り知れず、げに貞任殿の生れかわりとはやし申さるる。

レーロレン、レーロレン - - -

第四節の《勝手な解説》

鎌倉幕府は平泉征伐後、捕虜とした由利八郎が降伏したのを許し、元の領地を安堵して御家人としました。その後北条氏によって所領を没収され、由利一帯には長い混乱が続きます。

この混乱を鎮めるために、鎌倉殿は「由利十二党」を指名しました。これらが連合し、次第に一揆的結合体になったと思われます。

没落した由利家のことには、全く触れていませんが、この末孫が事件を起します。その事件がこの物語のハイライトです。

江戸期に作成された『奥州永慶軍記』や『出羽風土記』などには、十二の豪族だけではなく、それ以上の数が出てきます。どちらも信頼性に欠けるものですが、十二に固定されたのは、鳥海山を薬師如来に見立て、その周辺に十二神将（薬師如来を護る十二の善神）を配した、鳥海山修験の影響という説があります。

十二神将は、仏教成立以前からインドのバラモン教・ヒンズー教の神々を、仏教に取り入れてその守護神にしたものです。そのなかには「伐折羅(ばさら)」という神将があり、これは戦国末期、伊達政宗や佐々木堂誉などが「バサラ大名」と自ら名乗ったことでも知られています。

甲冑をつけ踊るような姿の神像が、平安後期には数多くつくられたようで、いまでも各地に残されています。さらに、十二支になぞらえられ干支(えと)の神々となり、またさらに〈文殊像菩薩〉〈虚空蔵菩薩〉など菩薩の守護神と位置付けられました。

前節と同様、ここでも係累は一代飛び、萬徳御前の御孫「玉百合御前」とその姉「玉鶴姫」が登場します。

「百合姫」も「鶴姫」も、すでに浄瑠璃語りなどのなかで広く流布していたものです。しかも、それぞれが語られる土地の風土に合わせ、様々に編曲されたものがいまでも残されています。

矢島の大江左衛門尉義満は、「安倍の矢島」と名を変えて婿になり、玉鶴姫の間に「安倍五郎の満安」をもうけました。

重要なことは「龍王殿の相婿」という設定です。

玉鶴姫は、香澄姫と鳥海山の龍王の娘ですから、これで「安倍の血筋」が「龍王」によってさらに補強されたことになります。

身体が弱く、旗頭を仁賀保に譲らざるを得なかった矢島の義萬に、屈強な子が生まれたのです。

安倍五郎の満安が貞任の生れ代わりといわれる由縁がここにあります。身のたけも同じく七尺五寸でした。

これで矢島の家筋も安泰です。





写真は、「矢島郷土資料館」の「満安像」

第五節

さるほどに、矢島の殿は安倍五郎満安殿の代になり、同國仙北郡西馬音内の城主小野寺肥前守茂道殿の御息女を奥方に迎へ、男女の御子をまうけたれども、先代の時、旗頭の役を離れ、十二党の末筆になつたれば、捗々(はかばか)しいこともなくて日を送り申したる。

或る時秋田城之助殿より賀の祝のお招きあつてお客に参り、祝儀終つて別間に寛いで、相客の面々と雑談の折しも、そこへ参つてムズとばかり上座に着いたるは、由利郡瀧澤館の城主、瀧澤忠八郎政家とて、由利の中八維平の末孫。

昔は由利一郡の領主であつたとかねがね先祖自慢をする男、矢島五郎殿の方へ向き直つて、ヤア矢島殿、御身は鎌倉殿の由緒ある大江の苗字をすてて、貞任の末孫だとして安倍の矢島と申さるるさうな、それで十二党の旗頭の格に直らうと企てるなどは以ての外の望みでお座らうぞ、身長が高うて旗頭になれるなら、濁活(うど)や虎杖(いたどり)で七間四面のお堂も建たう、ワツハワツハと高声に笑ふ。

矢島殿も一座の手前黙つても居られず、

アイヤ瀧澤殿、我等十二党の旗頭となられうともなられまいとも、党の列でない御身の撮配(さつぱい)は受け申さぬ。さて又大江と安倍についての御評のだが、士(さむらい)の一(いっ)多有無(たうむ)はその身その家の存亡ではお座らぬ。士(さむらい)の道に背くか背かないかでお座る。成る程衣河殿も平泉殿も、源氏の爲に亡ぼされたが、弓矢の道を取りはづし、恩義を忘れたといふ沙汰は聞き申さぬ。

然るに御身がかねがねご自慢の御先祖由利殿は、おめおめと鎌倉殿に生捕られた上で降参なされたはまだいいとして、平泉殿の恩義を思うて出羽に旗上げをした大河次郎兼任殿を裏切つた仕打は、士(さむらい)の道を外れたではお座るまいか。

さて又鎌倉殿に忠を尽されたかといふに、和田の謀叛とやらに一味して所領を召上げられ、やつと本領に帰参されたかと思へば、烏海彌三郎殿「祖先は龍だとして駟矧(みみず)が自慢する」と申すことがお座る。

御身の自慢も余り聞きよい自慢ではお座らぬとやり返せば、一座ドツと笑ひ崩るる笑止さよ。

レーロレン、レーロレン...

第五節の《勝手な解説》

屈強な若者は、矢島の殿様になり、名家の息女を奥方に迎えることができ、めでたい次第になりました。

奥方の実家・小野寺家は、源頼朝の平泉征伐で功をあげ御家人となり、その後仙北三郡を支配した大名です。

西馬音内はその分家であるとはいえ、由利十二党の旗頭とは格が違います。

そして、「秋田城之助殿より賀の祝のお招き」が逢ったということは、大変に名誉なことです。

「秋田(あきた)城之助(じょうのすけ)」は「秋田(あきた)城介(じょうのすけ)」が正式な書き方で、宝亀十一年(七八〇)に制定された役職です。

この年には、陸奥国の蝦夷(えみし)が反乱して、陸奥の国府・多賀城を焼き討ちした事件が発生しました。

それに呼応してこの地にも不穏な動きがあり、庄内地方にあった出羽国府の北を護る、重要な出先機関「秋田城」に、国司に次ぐ「介」が派遣されました。

雄物川の河口・秋田は、蝦夷(えみし)の地といわれる時代以前から、政治や外交や交易の重要な拠点でありました。

「秋田城」は、関ヶ原の戦いで敗れた佐竹氏が、この地への移封され、それを廃し新しく「久保田城」を築くまで続けました。

名誉ある秋田城之助殿よりのお招きに、矢島五郎は喜び勇んで出かけます。

だが、ここで事件が起きました。

秋田城における正式な場ではなく、別間・控の間で起こった事件だけに、身近さとともに哀れさを感じさせます。

控の間では、上座に由利郡瀧澤館の城主・瀧澤忠八郎政家が無遠慮に座りました。由利の中八維平の末孫として当然だといわんばかりです。

それだけではなく、かつての旗頭の家系を継ぐ安倍五郎満安を散々に笑いものにしました。満座の中で「獨活(うど)の大木」とからかわれたのでは、安倍五郎満安も黙っているわけにはいきません。

「士(さむらい)の一(いっ)多有無(たうむ)はその身その家の存亡ではお座らぬ。士(さむらい)の道に背くか背かないかでお座る。」

安倍五郎満安は、武士道の忠義をさとします。

ここで止めておけばよかったのですが、瀧澤忠八郎政家の家筋まで非難してしまいました。

瀧澤忠八郎政家が自慢する御先祖由利殿が、平泉没落の時源氏に寝返りを打ち、大河次郎兼任の忠義を果たさせなかった事、その後和田の謀叛に一味して所領を没収された事などをあげ、目先の利に走る姿は侍の風上にも置けないと、ゆゆしいことまでいってしまったのです。

安倍貞任の弟・鳥海彌三郎が突然に引き合いに出され、彼の話として伝わっていたのか「祖先は龍だとして駮矧(みみず)が自慢する」と、みみず扱いされ、一同の笑いものにされたのでは、瀧澤

忠八郎政家も我慢が出来ません。

合戦は武士の習い、この対立はどうにも止まりません。

瀧澤と安倍の口論が十二党を巻き込んで発展していきます。みみずと龍の戦いとして語られるのです。

龍は、勿論鳥海山の龍王の血筋を引く矢島五郎となります。

第六節

さるほどに、秋田殿の賀の祝ひに、満座の中で恥かいた瀧澤の城主由利殿は、この恨みを返さうにも己れの力に及ばぬゆゑ、十二党の旗頭仁賀保大和守明重殿を尋ね、

近頃奇ツ怪なるは矢島殿の野心、御存じなくては危うお座るぞ。かの矢島殿、旗頭の格を御當家に召し上げられ、待てども待てども返されぬを殘心に思ひ、所詮は十二党の仲間なればこそ、遠慮氣がねもあれ。

地大名になつて思ふ存分にせばやとて、

大江の苗字を棄てて安倍の矢島と名乗り、御當家を始め十一党を叩きつぶして、由利一圓を手に入れうの企て確かでお座る。御用心めされと注進する。

大和守殿ハツタと膝を打つて、さこそあるべいと睨んだるぞ、イザこなたから不意に押寄せて討ち取らうずる。

近間なれば玉前信濃守殿を誘はうかとて、矢島玉前両勢八千騎、揉みに揉うて矢島に押寄せ、大和守殿は自身大手門に馬を寄せ、勝鬨の声をドツドツと上げける。矢島の五郎満安殿之を見て、

ヤア理不尽の押寄せよ。無用に人をばあやめるな。一騎討の勝負すべいとて、大門サツと押開かせ、押來る敵をバラリバツと人礫(ひとつぶて)にして、仁賀保大和守に追すがり、生首ズンと引き抜いたれば、

寄せ手は蜘蛛の子を散らすやうに逃げ失せる。

さても仁賀保の御城にては、嫡子大和守安重殿、お跡継ぎに立たれ、父の讐(あだ)の矢島殿を討たでは叶ふまじいとて、千余騎にて攻め寄せたれども、

之も先代と同じく討ち殺されたれば、従弟の宮内少輔治重殿と申さるるが跡目を相続して、子吉の次郎芹田伊豫守を加勢に頼み、矢島の城に押寄せる途中、近習のものゝ爲に刺殺されて一戦にも及ばず、

之に依て仁賀保の一族評議の上、治重殿の女に子吉兵部少輔殿の御子息八郎殿を聲に取って、八郎重勝と申さるる。

重勝殿、我こそ本望を遂げうぞと、逸りに逸つて矢島に押し寄せたるところ、矢島五郎満安殿の手裏剣一本にて、あへなくも命を落したれば、今は仁賀保の家を継ぐべき人がお座ない。

依て十一党相談の上、赤尾津孫九郎殿の次男兵庫頭勝俊殿を仁賀保の家に据ゑ、赤尾津芹田その外党の面々、撃つて矢島の城に押寄せうと評議まちまちのところへ、仁賀保殿の御城下院内の禅林寺方丈、矢島の御城下大森高建寺の方丈、慈悲忍辱の法衣の袖を聯ねて申さるるやう、

かかる修羅のおん有様、出家の身としてよそに見申すべきやう更にお座らぬと、双方へ御仲裁を申し入れ、かなたへ参りこなたへ参り、さまざまに申し宥めたるによつて、ここに目出度く和睦を取結ばるる。

レーロレン、レーロレン、

レンレン - - -

第六節の《勝手な解説》

合戦は武士の習いとしても、滝澤には矢島の五郎を打ち破る力がありません。

矢島五郎は、その一代前は旗頭だったとしても、いまは十二党の末筆です。滝澤は、上位の十一党を巻き込んだ分裂を利用しようとしています。

武士の合戦といっても、ここで展開されるのは、子どもの「ガキ大将争い」のようなものですが、由利一帯の主だった家筋にはこのような経緯があるという具体性が重要な要素です。

この地方の有名な家筋がほとんど紹介されます。

物語を聞く人々は、近所のゴシップを聞くように興味津々だったのではないのでしょうか。

滝澤は、由利十二党の旗頭である仁賀保殿を担ぎ出し、安倍五郎満安を攻めますが、その手裏剣の技にひとたまりもなく負けてしまいます。

手裏剣は安倍に伝わる秘伝の術でした。

旗頭の仁賀保の殿様が殺されたのでは、十一党としても引くに引けなくなってしまいました。滝澤の謀略がとりあえず上手くいったのです。

しかも、肝心の旗頭の家は、内紛あり、相続問題ありで落ち着きません。

「仁賀保殿の御城下院内の禅林寺方丈、矢島の御城下大森高建寺の方丈」という双方から坊さんが出てその仲裁をし、ともかくも表面上は和議となりました。

「由利十二党」は、前にも書いたように中世期の一揆的結合体として機能したのではないかといわれています。

豊臣秀吉はこれらの一部を変更して「由利衆」として支配しました。「奥州仕置き」の一つの形です。

結合体が大きな勢力にまとまるよりは、分裂したままの方が御しやすいと、秀吉が考えたのかもしれません。由利の雄はまだ確定してなかったのです。

関ヶ原の合戦後、仁賀保氏は幕臣となり、赤尾津氏は改易され、その他は最上藩や佐竹藩の家臣となったりして、この結合体は解体していきます。

次の節はこのようなことを背景にして読むと少しは理解できそうです。

第七節

さる程に、十二党の戦も止み、山北一圓静溢となつたるが、その翌年の秋、出羽山形の太守最上修理太夫殿より矢島五郎殿への御直書に、

其許勇力の趣、関白殿下の御聞きに達し、御馬副に召し出さるる旨の御上意あり、それにつき内々申含めの筋もあれば、早速出府せられよとある。

五郎殿、さらば発足せばやとの仰せに、老臣ども諫むるやう、十一党表に和睦とは申せども心底のほど測られ申さず、今暫く見合はせて、様子をお探りめされといふを、

五郎殿押とどめて、身の安危、家の存亡は天命なれば致し方ないぞ、士(さむらい)は只正道(しょうどう)を一途に守つて臆せぬものぞとて、

小坂左近、塩越孫六といふ二人の近侍を供につれて、海道越しに山形の館へと罷り出づる。

太守修理太夫殿、五郎殿を御前に召され、さてさて遠路の出府大儀、聞きしにまさるあつぱれ骨柄よナ。

して十一党と連年の合戦は如何の次第ぞ、先づそれを聞かうとの仰せに、五郎殿畏まつて、瀧澤の仲八と先祖の論をしたることより、仁賀保殿を始め十一党の押寄せとなつたる顛末を理非明白に申し述べ、我等よりは一度も合戦をしかけたる覚え御座らぬと、實証をあげて辯じたれば、
修理太夫殿、さらば、馳走を致さう程に、肴に望みがあらば申せといふ。

五郎殿畏まつて、とてもものに最上川の大鮭を丸焼きにして給はれと申せば、安き程のことよとて、太守殿御指図ある。

総て三尺余りの大鮭の丸焼き、一升八合入りの大盃、飯はこしきのまま持ち出でられて、いざ参れとの仰せに、五郎殿忝しと酒は八盃まで重ね、大鮭は頭からムシャリムシャリと食ひかちつて、こしきの飯は粒も残さず頂戴申したふるまひに、太守殿横手を打ち、さてさて奇代の豪のものぞ、惜しき勇士なるケニ、打明けて申し聞かせん。

殿下の御馬(おんうま)副(ぞえ)に召すとは詐(いつわり)、十一党の嘆き訴へるに任せ、其許を誘きよせて打ち殺さうの計らひであつたるぞ、

これ見よとて左右の幔幕を払へば、鐵砲に火縄の侍三十余人、二間鑓のもの三十余人、身構へたるまま現はれたるを、五郎殿チロリと見渡して、

さこそあるべいと存じ申したとて、ウムと下腹に力を入れれば、上袴の紐フツと切れて、八十八本の手裏剣は、腰蓑のやうに下つたるを丁當と叩き、我等殺され申すまでには、この手裏剣七八本は御館殿のお身を通つてお後の柱にとまり申さうといふ。

太守殿舌を振るって、イヤイヤ其許は唯ものではないぞ。向後に於ては、十二党悉く當表へ参観させ、六番二組の直旗本申しつけよう所存なケニ、確執あらば奉行所へ訴訟致せ。私の成敗は曲事に申しつけたぞ。

先づそれまでは矢島に帰り居れとて、白銀五十枚に中黒の紋のついたる旗を下され、面目を施して帰らるる。

レーロレン、レーロレン

、レンレン----

第七節の《勝手な解説》

出羽山形の最上氏は、南北朝時代からの武士団ですが、この物語はその詳細には触れず、ただ、安倍の血を引く安倍五郎満安の勇士ぶりを豪快に語っています。

手裏剣の話、大鮭の丸焼きと酒と飯、これらは当時の豪傑の条件だったのでしょうか。

大きな器に山盛りにしたご飯を食べる「強飯(ごうはん)」という儀式が修験の山にはいまでも伝わっています。

「出羽山形の太守最上修理太夫殿」の仲裁ぶりはほんの付けたしで、仲裁にもなっていません。

ただ甘言をもって安倍五郎満安を呼び、矢島を離れさせ、その間に十一党が矢島を討ち取ることを約束していたのかもしれませんが。

親子の争いまでしてのしあがってきた最上氏らしさは全くなく、後にある節でもそうですが、優しい最上氏像が語られています。

しかし、混乱期を最上氏に頼らざるを得なかった時代背景は、しっかりと押えています。

話は変わりますが「山(せん)北(ぼく)一圓」という表現のことです。この山は当然鳥海山を指します。その山の北というのですから、矢島や由利や仁賀保などを意味しています。

しかし、何時の頃からなのか「山北」は「仙北」と表記され、「仙北郡」は鳥海山から離れた雄物川中流域に設定されています。

ここで語られる「山(せん)北(ぼく)一圓」は「由利郡」「雄勝郡」と二分されていまに至っています。

なぜか地名が動かされたとしか思えません。

秋田県の古代中世の歴史を探訪する時、「雄勝城」がどこにあったのか、文献と埋蔵文化財発掘結果との解釈がまちまちで、いまだに決着がついていないため、迷うことがしばしばあります。

この物語でも、「雄勝郡」の表記はなく「仙北郡」と「山(せん)北(ぼく)一圓」が無定義に使われています。

第八節

さるほどに矢島の五郎萬安殿は、山形のお館にお暇乞ひの上、今度は山道を矢島へと急ぎ、最上の渡しにさしかかつた時、藁頭巾に深々と顔を隠して馳せて来るものに逢うた。

堤林の隼人として五郎殿の家來なるが、バツタリ土に下座して手をつかへ、御大事々々々、殿御留守のところへ、仁賀保を始め十一党、それに瀧澤も加はつて、大手搦手から押寄せ参つたほどに、必死の防戦は致したれど、多勢に無勢、搦手から押破られ、御舎弟與兵衛尉殿を始め、味方は大半討死を遂げ、若君お二方も無残に刺殺されたるが、何と思うたことか、奥方だけは山駕籠に乗せ、侍五六人附添うて、西馬音内の御實家へ送り届けた様子でお座る。

今矢島のお城には十一党のものども楯籠つてゐるケニ、矢島へお帰りは危うお座る。一先づ西馬音内へ御越しなされて、御旗上げの御用意めされといふ。五郎殿舌打して、さらば西馬音内へ参らうと、主従四人道を急ぎ、舅小野寺肥前守茂道殿のお城へ参らるる。

この事早くも十一党のものどもに聞えたれば、仁賀保殿を始め案に相違と仰天した。

五郎満安山形のお館で打殺されたと思つたるに、生き還つて小野寺肥前守殿を便つては、虎に翼の譬、何としたらよいものかと、評議まちまちのところへ、瀧澤忠八進み出て、我等に思案がある、お任せあれとて、小野寺肥前守の本家、平鹿郡横手の城主、小野寺遠江守義道殿へ口弁達者なもの二人を遣はして、さも親切氣に申すやう、

御分家肥前守殿には去年の頃より内々合戦の御用意と見え申したが、今度愈々矢島の悪龍と呼ばれる聲の五郎を呼び迎へ、當横手のお城を攻め取り、

肥前守殿は當城に五郎は西馬音内に知行割も定まつたげにお座る。御用心なさらずば、危うお座らうといふ。

遠江守殿は音に聞えた氣荒の大將なれば、さらば即刻此方から押寄せて、西馬音内を退治せよとて、老臣大森五郎康道に八千騎の軍勢を添へて西馬音内へと遣はさるる。

レーロレン、レーロレン、レンレン - - -

第八節の《勝手な解説》

案の定、留守中に矢島の館は取り囲まれ攻め落とされます。

若君二人も殺され、妻は命からがら実家へと逃げました。安倍の血筋はどうなったのでしょうか。

それは後段の楽しみとして、またもや滝澤の謀略が語られます。

「矢島の悪龍・安倍五郎満安」が、妻の実家を継ぎ、舅の小野寺肥前守茂道は本家である平鹿郡横手の城主・小野寺遠江守義道を乗っ取ろうとしていると、由利十一党は本家へ注進におよびます。

安倍五郎満安は自分たちの手で倒せる相手ではないと、最上氏を頼ったのですが、この手はうまく運びませんでした。

次ぎの手は、横手城主の軍力を利用し、本家分家争いという家内騒動に移行させることです。

親子も敵として戦った時代です。本家・分家などの関係は、利害の求め方によって敵にも味方にも直ちに変わった戦国の世でした。

山形の最上氏で修理介を称したのは義守だけです。

義守はまだ山形盆地を支配していたに過ぎませんから、秀吉が「由利衆」としてまとめた「由利十

二党」と連携する意図があったのかもしれませんが。

しかし、義守は、関ヶ原の戦いで東軍に組した息子・義光に討ち取られます。そして義光は、庄内地方を手にし山形県の大部分を支配しました。

横手城主小野寺義道も東軍に敗れ、領地を没収されました。最上修理介とともに果てたのです。

舞台はまさに戦国末期のことです。

矢島の五郎萬安は、「有耶無耶の関」がある海筋を来たのですが、帰りは山道を辿りました。

この山道の途中に「鶴間ヶ池」があるのです。

さりげなく名所を思い浮かばせる仕組みです。

本家横手城からは、西馬音内の分家征伐のために老臣大森五郎康道が派遣されました。



夏の「鶴間ヶ池」

第九節

さるほどに、大森五郎康道つくづく思ふやう、肥前守殿御謀叛治定とは申されまじい。若し不實の唱へによつて、本家別家弓矢に及ばば、世の物笑ひにならうとて、

先づ西馬音内の東の松山に陣を張り、西馬音内城に手紙を送る、その趣は、此度矢島の五郎殿を御城内に抱へて御謀叛の旨、その聞えあるに依て討手に向ひて候。但し御謀叛の筋なくば、その實証見届け申して御和談勿論にて候とある。

肥前守殿之を見て、不實の風唱に實証のあるべきや、返答無用、討て出て蹴散らせといふ。

五郎殿之を止め、我等より私の手紙遣はして大森の了簡を聞きたいことのお座れば、暫らくお任せあれとて、

さてしたためたる手紙の趣には、今度のこと、我等舅を便つて當城へ参り居る爲に、本來御両家の間、弓矢の沙汰ともならんずる条嘆かはし、

若し我等自害して相果て、首級をお渡し申すに於ては、御一和相違なきか、屹と御返事あれとある。

さて大森よりの返書には、御申し越されたる通りならば、御両家の御一和相違なく請合ひ申すとある。

肥前守殿それを見て、聳殿以ての外の心づかひ、

何の自害にや及ぶべきと申されたれども、

矢島殿は肌押しくつろげ、斯くの通りと、手裏劍の切先、胸から背に出たるを見せ、御冤と庭に下り

て脇ざし引ぬき、我と我首を斬り取つて、お庭の堀の外へと投げ出さるる。

それと見て堤林の隼人、小坂左近、塩越孫六も腹を切る、

奥にては矢島の奥方も咽喉搔き切つて自害したれば、肥前守殿は泣く泣く聳の首級を大森が陣へ送る。

大森は仔細御座なしとて首級をば城内へ還して

横手へと引上げらる。

レーロレン、レーロレン、レン

レン - - -

《勝手な解説》　　ここは解説するまでもありません。

修羅場の大見得です。

あらぬ風評の板ばさみとなり、引くに引けない本家と分家でした。

分家の聳が犠牲になるのが、最も落ち着く解決策でした。

矢島の悪龍・安倍五郎満安は、安倍家伝来の秘術「手裏劍」の切先で「我と我首を斬り取り」しかも、自らの手で堀の外へ投げたという話は、聞いている人々に「さすが矢島殿」と感心させます。

侍の義に殉死した見事さです。

同時に、第一節での安倍貞任の死「我と我手に首を刎ねた」場面を思い起こさせます。

しかし、ここで終わったのでは庶民の気持ちは納まりませんでした。

第十節

さても矢島のお城落城の砌、城内に居合せたるは、鳥海が岳・鶴間ヶ池の女別當、宮の巫女月光と申さるるお人にて、ことし五歳に成る矢島殿の姫君小百合子のおん守をして居るところへ、思ひもかけぬ俄の合戦、

姫君おん大事と抱きかかへ、奥庭の犬くぐりから葡ひ出たときには、矢島方ちりぢりばらばらの様子なれば、

かうして若しも敵に見つけられたらば、姫君のお命は助かるまい、山形まで逃げのびて、殿さまへお手渡し申さでは叶ふまじいと、

蓑ケラに姿をかへ、野に伏し山に伏してやうく、山形にたどりつき、

矢島の殿はと伺へば、

先だつて矢島へ帰ったれど、聞けば矢島は十一党に攻取られたとのことなれば、今はどこにどうして

るやら知れぬとのこと、

月光巫女かねて大守殿の御館へも出入のことなれば、屹と思案を定めて大守殿にお目通りを願ひ、

あはれこの小雛子(ちつぴよこ)、大殿さまのお羽がひの下で助けてたもれと涙を流せば、

大守殿つくづく御覧じて、世にも美しい雛子(ひよつこ)、よしよし、我が羽がひの下でぬくめてやると仰せられ、

御一門最上内膳忠殿を召され、これは御身の子ぞとて与へらるる。

内膳は大に喜んで、手の中の玉と大事にあやし立て、イヤイヤ小百合、よく帰って来た。

そなた生れて間もなく、仔細あつて矢島にあづけて置いたが、すんでのスツテン、あぶないところを助かつて生みの親の手に戻つて来たこと、

これしかし乍ら鳥海大権現の御冥助よと、夫婦心を揃へて蝶よ花よと育てらるる。

レーロレン、

レーロレン、レンレン――

《勝手な解説》

終ったと思われた「矢島の安倍」に、姫が一人残されていました。「小百合姫」です。

突然に「鳥海が岳・鶴間ヶ池の女別當、宮の巫女月光」というお守役の女性の話が出てきます

。

お守役の月光巫女が、姫をつれて山形まで逃げのびます。

山形の最上家の中で、五歳になったばかりの小百合姫は、蝶よ花よと育てられることになりました。

この縁は、子守り役の月光巫女がかねて最上の大守殿の御館へも出入した縁によると、さりげなく語られているのですが、第十二節にどんでん返しが待っています。

「鳥海大権現の御冥助」とは、第三節にある「秀衡の妹・萬徳姫」が「香澄姫」をつれて、鳥海山に逃げのびた話を連想させます。

これは、最後の楽しみとして残しておきましょう。

月光巫女の名は月光川に由来するのでしょうか。

現在の山形県遊佐町の「大物忌神社口ノ宮」（里宮）があり、その近くを月光川が鳥海山から流れ出ています。この川をさかのぼり、峰を一つ越せば、そこに鶴間ヶ池があります。いまではこの道をたどることはできません。

ここでは、月光巫女が十二世紀末の出来事に関連しそうだ、ということだけを頭の片隅に思い浮かべてください。

いま語られている舞台より、少なくとも四百年以上前のことです。

第十一節

さてその後、小百合姫、内膳殿に育てられ、成長につれてますますあでやかに美しく、生得の伶俐ゆゑに女の諸芸にも上達との聞えあつて、お館の奥勤めに召し出されたは、二八十六花なら三分の薄紅(うすくれなひ)、

館へ出仕の若殿原は、小百合見たさにうき身やつすもあれば、まだ見ぬ恋にあこがれて、ふみ玉づさを送るもあるが、小百合は少しも取り合はない。

ある日奥方様、千年山(ちとせやま)の櫻狩り、空に知られぬ落花の雪を、月もろともに踏み帰る、
宵の御殿の奥局、小百合が室の文几(ふづくえ)の上に一首の歌あり、

夏草の茂きが中に一もとの

姫百合の香ぞゆかしかりける　あげ羽の蝶

と、

櫻色の色紙に水墨のあと美しくかいてあるを見て、誰のしわざか、けしからぬとは思へども、歌のすがたは面白ければと、

小百合はその色紙の裏に

葉がくれの深山のさゆり咲きもあへず

浮世にもるる花の香やある

と書いたれど、元より手なぐさみのことなれば、そのままかいてて心にもかけない。

しかるに、程過ぎて又小百合の文几(ふづくえ)の上に、色紙が一枚のせてある。それには

露を重み咲きやなやめる百合の花

蝶の羽風を待てとしぞ思ふ　あげはの蝶

とあつた。

重ねてあやしいことと思ひながらも、筆とりて

谷川の瀬にこそ戦(そよ)げ山百合の

花には蝶の風も待たじな

とその裏に書き流して、取りすてようとしたとき、

「待たじとは心つよき人よな、そさま思うて、かほどに瘦せたを、哀れとは思ひめされないか」

と、いつ忍んで来て居たか、几帳の蔭から現はれ出たは、これぞあげ羽の蝶の君、
年は二十路(はたち)を越したか越さないか、山の端を出る新月(にいづき)の、桂のかほりもゆかしい若殿、紫の、ゆかりの色の裾濃(すそこ)の袴に、散らし模様(ちりめん)のあげ羽の蝶、
ヒーラリヒラヒラ、やはらかに吹く春風に、露も情も結ばるる。

レーロレン、レーロレン、レン

レン - - -

《勝手な解説》

合戦やだまし討ちや侍の義とか、肩の張る話ばかり語られてきた中で、この節だけは華麗に艶めいています。

お姫様と若殿様の恋物語といってしまうえばそれだけですが、才気ある女性が男につれなく振舞うことは、世の常だったのでしょうか。

だが、ついに二人は「やはらかに吹く春風に、露も情も結ばれる」ことになりました。

この一夜の恋を彩るために、

「千年山(ちとせやま)の櫻狩り、空に知られぬ落花の雪を、月もろともに踏み帰えった」春の宵以来の出来事としているのが、あでやかさを強調する仕掛けになっています。

あげ羽の蝶は、和歌に訴え、桜の宵という舞台装置を巧みに使い、つれなくされた女性を手に入れたのです。

桜に誘われて恋におちいる「お姫様と若殿様の恋物語」は、「坂上田村麻呂と白玉御前」の物語のように、出羽陸奥に広く流布した伝説です。

「あげ羽の蝶」は、館へ出仕していた若殿原の一人でした。最上家には各地の豪族から人質のように取り込まれた若者が、少なからず居たのでしょうか。

「あげはの蝶」は平家の紋です。源氏に滅ぼされた平家への想いが隠され、貞任の怨念が蘇ってきます。

「千年山」を「千歳山」のこととすれば、山形に城を構えた最上氏の霞城から見える山になります。

この物語に出てくる「山形の城」は此処だったのでしょうか。千歳山にも「あこやの松」という美しい姫の恋物語があります。

第十二節

さるほどに出羽の大守最上殿の御殿にては、ことし殿は四十二、奥方三十三の御厄払ひとて、鳥海の行者をお召しある。

いつもは行者と巫女のみ下ることなれども、ことしは、女別當の宮も下山して出府とあり、よそながらも拝み申して結縁にあづからばやと、集まり来る老若男女にて、御城下は押しも返されぬ群集、

御殿では、御老年の女別當殿、生絹(すずし)の浄衣のおん袖しづかに払って、ザングザングと振る鈴の音、八萬由旬の地の底まで響きわたるかとすさまじいおん修法。

さても祓ひの御修法終つて皆々室へ下つた後、女別當殿はひそかに小百合を招き、人を払って申さるるやう、

其許の実の父上は、安倍の矢島の五郎萬安殿、その萬安殿の御母上は、わが母上の姉君なれば、われと萬安殿とはいとこの間、其許とわれとは廻つたいとこなれども、山と世間と隔つたれば、今までは面會の折もなかつたぞ、

さて其許の父上、萬安殿は土(さむらい)の道を一途に守つて、少しも曲つた御心がなかつたケニ、

瀧澤仲八の奸計によつて、仁賀保殿の爲に亡ぼされ、其許の兄上二人は九歳と七歳のいたいけ盛りにて、之も仁賀保殿の軍勢に殺されたれば、

安倍の矢島の血統としては、其許の外には此世に残らぬほどに、其許は女ながらも安倍の矢島の魂ふり起して、親兄弟の鬱憤を晴らさではあるまじいぞと、事こまかに説き聞かせたれば、

小百合姫は涙をハラハラとこぼし、さありては、ここに居つてはたより悪い。

われ等を御山へつれて行てたもれと、

思ひ込んだる願ひに、女別當殿も、もだし難く密かにお山へ連れ帰らる。

レーロレン、レーロレン、レン

レン - - -

《勝手な解説》

出羽の太守最上家で行われた厄払いの神事に、鳥海の行者たちが招かれ、その中に老年の女別當がいました。

小百合姫をつれて最上家へ逃れてきた月光巫女の母親でした。

「萬安殿の御母上は、わが母上の姉君なれば、われと萬安殿とはいとこの間」

ということは、老年の女別當は玉百合御前なのです。

病身だった「矢島の大江義萬」が、旗頭を仁賀保に譲り、屈強の跡継がほしいと、鳥海山に登って祈願した時、一目ぼれしたのが玉百合御前でした。

第四節にその経緯が詳しく語られていますが、小百合姫を救った「月光巫女」は、「玉百合

御前」「香澄姫」「萬徳御前」とつながる由緒ある鳥海山の巫女だったのです。

「萬徳御前」は、怨念を持ちながら源氏に滅ぼされた「藤原秀衡」の妹でした。

玉百合御前にしても、名家とはいえ没落しかかっている、しかも病身の男に嫁ぐことになった姉・玉鶴姫への想いがあります。

巫女の血統は正しく継いでいても、俗世には小百合姫しか残されていません。

「女ながらも安倍の矢島の魂ふり起して、親兄弟の鬱憤を晴らしてほしい」と懇願され、小百合姫はその準備のため、鳥海山へと目指しました。

第十三節

さるほどに小百合姫、鳥海ヶ岳鶴間ヶ池の女別當の宮にこもり、親兄弟の鬱憤を晴らさんものと、三十三人の行者と三十三人の巫子を相手に、弓馬劍戟、中にも安倍の矢島の武芸、手裏劍の術を一心不乱に修行ある。

然るところ、悲しやな恥かしやな、お館に勤めの頃、あげ羽の蝶の君と、おぼろにかすむ春の夜の、かり寝の夢の實を結びて、懐妊の身とはなつたケニ、

泣けど悔めど詮すべなく、鳥海大権現の御宝前に身を投げかけ、あはれ身二つになつたる後、この本望逐げべくんば、鶴間ヶ池の岸に咲く山百合の花を墨染の色に染めてたび給へ、

又望み叶はぬものならば、昔ながらの色に咲かせてたび給へ、さらばこの身生きながら龍神の贄になり申さうと、二つに一つの誓ひを立てらるる。

さるほどに小百合姫は、翌るとしの夏、玉のやうなる男の御子を安々と産み落したるに、不思議や鶴間ヶ池の岸の百合は、みな墨色に咲き出づる。

さては本望成就するよと、勇みに勇んで兵術を修行するほどに、六十六人の行者も巫女も、一騎當千の手並となつたるケニ、

さらば下山して出陣せうと、

姫は甲冑の上に白の生絹の大かつぎをかつぎ、當年歳の乳児(みどりご)緑丸を懐き、うやむやの関屋に陣立して主従六十七騎、先づ瀧澤の城に馳せ向ひ、無二無三に駆け込めば、瀧澤勢たまりもなく散り散りに落ち失せる、

この次は仁賀保を討てとて、院内の城に馳せ向ひ、出向ふものを射ちらし薙き散らして、大手の勢を蹴破り、二の丸の軍勢をば姫の手裏劍で討ちすくめたるころ、

本丸のものどもは、暫し御猶豫あれ、申し上げたいことありといふ。

やがて老臣兩人、木戸口に出て来て申すやう、

當家兵庫頭は先日山形府にて病死仕(つかまつ)り、嫡男藏人、まだ家督相続の運びにも至らねども、城主たる條相違お座らぬケニ、

唯今之に出て降参仕(つかまつ)り、城を明け渡すべきに依て、あはれ主従の命はお助け下されといふ。

さらば藏人之に出でよといへば、やがてしほしほして出て来た藏人、丸腰にて両手をつくを、生絹(すずし)のかつぎ越しに、つくづくと見まもつたる小百合姫、

御身は上げ羽の蝶の君ではお座らぬかといふ。

藏人、あきれ顔に見上げるを、姫はジーツと見下ろして、懐の緑丸を藏人の前に押しすゑ、

城をば、この子に明け渡されよ、この子は我等の跡継なれど、御身の種でもあるぞよ、

と云ひ棄てて、六十六人のつはものをさしまねぎ、跡をも見ずに引き去つて、矢島の築股の山里に庵室を結び、法華經を讀誦して身を終らるる。

黒百合尼ぜとはこの人のこと、さても鳥海鶴間ヶ池には、今も墨染の百合の花、昔のままに咲

き出づる。

レーロレン、レーロレン、レンレン、

レーロレン、レンレン。



第十三節の《勝手な解説》

安倍の血を引く矢島の復活を目指して、仁賀保攻めが始まります。

鳥海ヶ岳鶴間ヶ池に籠った小百合姫は、「弓馬剣戟、中にも安倍の矢島の武芸、手裏剣の術を一心不乱に修行」しました。

だが「あげ羽の蝶の君と、おぼろにかすむ春の夜のかり寝の夢の實が結び」懐妊したことに気がつきます。桜が雪のように舞い落ちる一夜の夢でした。

仁賀保反撃が思い通りにいくのなら、この児を無事出産できた時「鶴間ヶ池の岸に咲く山百合の花を墨染の色に染めてたび給へ」と鳥海大権現へ祈ったかがありました。

鶴間ヶ池の岸の百合は、みな墨色に咲きに咲いたのです。

行者も巫女もひきつれ、小百合姫は乳児緑丸を懐き、まず「うやむやの関屋」に陣立します。

海岸側から仁賀保を攻めた話になります。

どの道を通るかについて様々な話が伝わり、それによって「矢島・仁賀保合戦」の内容が微妙に違ってきます。

この物語では、山形から海岸線に出て、有耶無耶の関に陣取りました。

まず、合戦のきっかけをつくり、謀略をめぐらした瀧澤勢が相手です。一息に滝澤勢を蹴散らし、仁賀保の二の丸である院内の城を手裏剣でなぎ倒し、本丸へと向かいました。

仁賀保の城はたまらず降参し、城主代理の嫡男藏人が丸腰にて両手をつき、小百合姫の前に出てきました。

それが「あげ羽の蝶」だったのです。

二人だけではなく、聞く人々も、この顛末には驚いてしまいます。

「城をこの子に明け渡されよ、この子は我等の跡継なれど、御身の種でもあるぞ」と、小百合姫は生まれて間もない緑丸を、あげはの蝶の前に押し据え引き渡しました。はからずも敵味方は和したのですが、暗に矢島の優位さを物語っています。

小百合姫は、鳥海ヶ岳鶴間ヶ池には帰らず、矢島の築股の山里に庵室を結び、黒百合尼となり出家してしまいました。

かつて矢島と仁賀保の仲介をしたという二つの寺は、ともに曹洞宗の寺としていまも残されています。

しかし、小百合姫の庵室の跡は闇の中です。

矢島の領地はなかなか落ち着かず、寛永十七年（一六四〇）讃岐高松十七万三千石の領主生駒高俊が故あって幕府の領地収公に逢い、矢島一万石に移封され一段落を迎えました。

それ以前の歴史は、物語の世界に残され、様々な物語が作られるようになったのでしょう。

現に、矢島の高建寺（仲裁の際矢島代表を務めた）には、打ち首にされた萬安の二人の子息の墓があるだけでなく、この物語とは微妙に違う伝承が残されています。

仁賀保の禅林寺は仁賀保氏の菩提寺で、いまも殿様一族の墓があります。

また、中山義秀の小説「百合物語」（昭和三十三年講談社刊）は、由利十二党の物語ですが、

これはいまの鳥海町にある猿倉を舞台として展開されています。鳥海山の東側、日本海側とは反対になります。

もともと「由利十二党記」そのものが、残された地域によって微妙に違っているのですから、どれが真実かと目くじらを立てるのは別のことです。

鳥海山には、現在、山形県と秋田県の両県から十箇所に登山道があります。これらすべてがかつての修験道ではないのですが、ほとんどが日本海側にあります。

「鶴間ヶ池」は、現在の山形県八幡町にあり、奥深くひっそりとした小さな池です。

矢島からこの池へ行くには、鳥海山を北から南へと越さなければなりません。

日本海側から行くにしても、鳥海町猿倉からにしても、奥深い山の中で、それだけに龍王が住むのには恰好の池だったのでしょう。

ともかく「鳥海ヶ岳鶴間ヶ池には、今も墨染の百合の花、昔のままに咲き続けています」

黒百合の花は、遠い昔、朝廷と戦って敗れた出羽陸奥の雄「安倍貞任」の怨念を示しています

。

それに、一国を支配する殿様の話ではなく、一地方の小さな旗本の地位を争う合戦だっただけに、この物語の哀れさがあります。

しかし、奥山にひっそりと生きる誇り高い姿を、黒百合の花に寄せたのです。

《結び》

引用文は、読みにくい部分があるのですが、あえてそのままにしました。

これは読み物ではなく、耳から聞く語り物として伝えられたものだからです。

聞くだけでこの物語の背景と内容に感動できた人たちがいたのです。

いまではゆっくり時間をかけて読んでも、理解するのが困難になりました。

《勝手な解説》は、なんとか理解しようとした、あがきの解説です。

解説ではなく、単なる《勝手な連想》となっているところが多くあります。

ただ、安倍貞任伝説の一つとして、このような形で残っていたことを書きたかったのです。



〈了〉